

読解において推測を伴う外的支援は 付随的語彙学習を促進するか —多肢選択語注と単一語注の比較—

徳田 恵

1. はじめに

第二言語の教室学習は時間が限られており、語彙指導のために初級から上級まで一貫して時間を割くことはカリキュラム上難しいと言える。故に、中級以上では語彙のみを取り上げた教師指導だけではなく、学習者自身が読解や聴解等を通して語を学ぶことが必要になってくる。しかし、学習者が「なかなか覚えられない」と言うのを耳にすることも多い。そこで、読解を通して付随的に語彙学習する際により語を覚えやすくするにはどうすればよいかを探ることが重要な研究課題になるのではないかと考えた。

2. 付随的語彙学習の定義

本研究では、内容理解を主目的とした読解など語彙学習以外の学習を通じて語彙を副産物として学ぶことを付随的語彙学習と捉えることとする（投野,1997；谷内,2003）。

3. 先行研究

Laufer & Hulstijn(2001)が提唱した Involvement Load 仮説によると付随的語彙学習において語を覚えやすくする要因は、①必要度(need)②検索度(search)③評価(evaluation)だと言われている。Lauferらはこの3つの総量を Involvement Load と称し、語を処理するのに必要な Involvement の総量が大きいほどその語の保持率は高くなると主張した。

例えば、語注では第1言語（以下 L1）や類義語1語で意味を与える単一語注と、いくつかの選択肢の中から文脈に合ったものを選ぶ多肢選択語注とでは、文脈と検討する評価が伴う分だけ多肢選択語注のほうが効果的だと言われている。同様に辞書も評価が伴い、また調べるという検索も行われるため Involvement の総量が大きく、より語が覚えられる。

しかし、これには次のような問題点がある。多肢

選択語注や辞書にはいくつかの意味が記されているので、そこから文脈に合った意味を検討、つまり評価を行い、一番適切な意味を選ぶのだが、その過程には推測が伴う。その際、誤った推測から間違った意味を選択してしまう可能性は否めない。

このように、誤った推測が起きることを考えると、Involvement Load 仮説では十分に語彙学習は説明ができないと言える。実際、Involvement の総量は多肢選択語注のほうが単一語注より大きいはずだが、これら二つの条件を比較した Watanaba(1997)では、有意な差が認められていない。

Nagata(1999)では多肢選択語注でも正しい意味が確定できれば単一語注よりも語彙学習が促進されると考え、コンピュータを使ってフィードバック（以下 FB）を与える多肢選択語注と単一語注を比較したところ、予想通りの結果を得ることができた。

だが、Involvement Load 仮説では意味が確定できなくても Involvement の総量は同じである。つまり、誤った推測をしてしまった場合でも、正しい意味を学習した場合でも Involvement の総量は同じになってしまう。このように、Involvement Load 仮説では語彙学習を説明するには不十分で、もう一つ「確定」という要因が必要だと考えられる。「確定」を加えることで、Involvement の総量が大きく、意味が確定できる条件で最も語彙学習が進むと説明できるはずである（表1）。

表1 Involvement Load の総量と「確定」

	必要度	検索度	評価	確定
単一語注	+	-	-	+
意味が確定できる 多肢選択語注	+	-	+	+
意味が確定できない 多肢選択語注	+	-	+	-

以上から、本研究では読解において語の意味を覚えやすくする条件を探るために、Involvement の総量が大きく意味が確定できる外的支援が Involvement の総量が大きいだけの支援や小さい支援より語彙学習が促進されるかどうかを調べることとした。

本研究では、単一語注と多肢選択語注を用いて Involvement の総量を統制することとした。多肢選択語注には正しい意味が確定できる即時 FB がある条件（多肢選択語注＋即時 FB）と無い条件（多肢選択語注－即時 FB）とを設けることとした。

また、長期的な効果と語の意味の理解の深さに Involvement の総量の影響が見られるかも検討する。

4. 研究課題

研究課題 1-1) 「多肢選択語注＋即時 FB」は、「多肢選択語注－即時 FB」や「単一語注」より語彙学習を促進するか。

研究課題 1-2) 「多肢選択語注＋即時 FB」は、「多肢選択語注－即時 FB」や「単一語注」より長期的保持を促進するか。

研究課題 2-1) 読解直後では各語の理解の深さは読解条件により異なるか。

研究課題 2-2) 長期的には各語の理解の深さは読解条件により異なるか。

5. 研究方法

5.1 研究デザイン

・研究計画 研究課題 1 には、まず対象語の意味を L1 で書かせる語彙テストの得点を指標として、3×3 の分散分析を用いた。第 1 要因は読解条件で、単一語注群、「多肢選択語注＋即時 FB」群、「多肢選択語注－即時 FB」群の 3 水準である。第 2 要因は、テスト時期で事前語彙テスト、直後語彙テスト、遅延語彙テストの 3 水準である。研究課題 2 には、読解条件、伸び方（「完全な伸び」：0 点から 4 点への伸び、「中間の伸び」：0 点から 1～3 点、1 点から 2～4 点・2 点から 3～4 点・3 点から 4 点、「学習無」：全く点が伸びなかったもの、得点が減退したもの）を要因として 3×3 の χ^2 検定を行う。事前テストから直後テスト、事前テストから遅延テストと二つに分けて分析する。

・被験者 日本国内の民間日本語学校で日本語を学ぶ中・上級学習者・中国語を母語とする 41 名。単

一語注群が 13 名、「多肢選択語注－即時 FB」群が 14 名、「多肢選択語注＋即時 FB」群が 14 名である。

・手続き 事前に既有語彙知識を測定するための語彙テストと日本語能力を測定するための SPOT を実施した。その 2 週間後に処遇を行った。3 群に分かれて読解を行い、その直後に内容理解問題、直後語彙テストを行った。処遇の 3 週間後に遅延語彙テストを行った。また、読解後と遅延テスト後のアンケートで、辞書を使用したか尋ねた。これは処遇の効果か辞書で調べた効果かを判別するためである。

・読解材料 「電車内、まなごしの行方」（『日本語上級読解』（アルク）の 8 課）を修正して使用。語数は 742 語、未知語の割合は 6.29% だった。

・対象語 事前テストで L1 訳正解の割合が 20% 以下のものを対象語とした (Watanabe, 1997)。

・語注 被験者の L1 で意味が提示された。各語注は、対象語が現れる行の右端に置かれた。

単一語注 各群の読解中の作業を統一するため利用した場合に✓印をつける形式にした。

例) …かたときも休まずいじくる ※いじくる 摆弄

多肢選択語注＋FB 選択肢の数は 4 つにした (Hulstijn, 1992)。錯乱肢は以下の基準で、6 人の中国語話者が作成した。1) 文脈から全くはズレた意味の語ではないこと。2) 表記から全くはズレた意味の語ではないこと。3) 正解が 2 つ以上にならないこと。確定のための即時 FB はスクラッチで与えた。各選択肢の前にスクラッチで塗りつぶされた□があり、そこを消しゴムで削ると正答 (○) か誤答 (×) が現れる仕組みになっていた。

例) ※いじくる 梳理 触摸 整理 摆弄

多肢選択語注－FB 選択肢は「多肢選択語注＋即時 FB」と同様である。語注を利用した場合に、正しいと思う選択肢に✓印をつける形式にした。

例) ※いじくる 梳理 触摸 整理 摆弄

・テスト材料 事前テスト・直後テスト・遅延テストは同じ形式・項目であった。対象語への注意をそらすために 29 語を加え、42 語から成っていた。

5.2 得点化

語彙テストの得点化は 3 人の中国語話者（うち 2 名は日本語教育を専攻する大学院生、1 名は研究生）によって行われた。採点基準は Mori (2002) を参

考に5段階評価した(表2)。3人の評定者が各自採点、一致しないものについて協議を行った。協議でも一致しないものは、3者間の平均値を得点とした。最終的な評定者間信頼性は $r=.99$ だった。

表2 Mori (2002) の採点基準 5段階評価

全然関連がない	: 0
大体のところで合っている	: 1
非常に重要なところで関連性がある	: 2
まあまあ近い意味	: 3
正解	: 4

6. 結果

6.1 研究課題1の結果

読解条件(3)×テスト時期(3)の分散分析の結果、読解条件に有意な差は見られなかった($F(2,38)=0.26$)。テストの主効果のみが有意で($F(1.43,54.27)=66.46, p<.01$)、交互作用は有意ではなかった($F(4,76)=1.06$)。テストの主効果について多重比較(TukeyHSD法)を行った結果、直後テストが事前テストよりも有意に高く、遅延テストは直後テストよりも有意に低かった($MSe=71.64, p<.01$)。事前テストと遅延テストの間には有意な差は認められなかった(図1)。

6.2 研究課題2の結果

研究課題2-1)の結果

χ^2 検定の結果、対象語数の偏りは有意であった($\chi^2(4)=18.72, p<.01$)。残差分析によると、単一語注群では「完全な伸び」が有意に多く、「中間点への伸び」「学習無」に負の残差傾向が見られた。「多肢選択語注-即時FB」群では、「完全な伸び」が有意に少なく、「中間点への伸び」が有意に多い(図2)。以上から、単一語注群で各語の理解が最も深いことが分かった。また、「多肢選択語注-即時FB」群では、正しく覚えている語が少なく、理解が浅い語が多いことが明らかになった。

尚、「多肢選択語注+即時FB」群は、有意差は見られなかったが、「多肢選択語注-即時FB」より完全な意味で覚えている語が多いことが分かった。

研究課題2-2)の結果

事前テストから遅延テストへの伸びに関しては χ^2 検定の結果、対象語数の偏りは有意ではなかった。つまり、長期的には各語への読解条件による影響は見られなかったことになる(図3)。

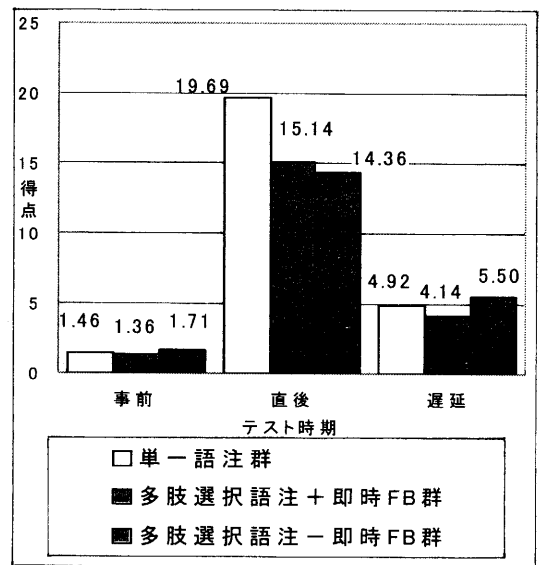


図1 語彙テストの成績

7. 考察

7.1 研究課題1に関する考察

研究課題1では読解条件による差は見られなかった。なぜ Involvement の総量も大きく意味も確定できる「多肢選択語注+即時FB」群が最も良い成績に成らなかったか。これは、本研究の即時FBの与え方が影響していると思われる。本研究では、実験前に被験者にスクラッチを削れば正解があることが事前に説明されていた。スクラッチさえ削れば、十分文脈と検討しなくても正しい意味が分かるようになっていた。「多肢選択語注+即時FB」群の被験者の語注利用状況を見たところ、182語中158語と3群のうち一番利用されていた。そして、そのうちの46.2%が2回以上スクラッチを削っていた。このことから、安易にスクラッチを削った被験者が多かったのではないかと推測した。このため評価が十分に起こらず、Involvementの総量が単一語注群より大きくならなかったと思われる。

また、長期的な保持については、先行研究でも効果は確認されておらず、本研究でも一度の遭遇で長期的に保持されるのは難しいことが示唆された。

7.2 研究課題2に関する考察

まず、「多肢選択語注-即時FB」群において語注の利用状況を調べたところ、36.26%が誤った選択肢を選んでいった。このことから、評価の際に誤った推測が起り、学習が進まなかったと考えられる。この誤った推測が原因で、正しい意味が確定できる単一語注群を上回ることができなかったと言える。

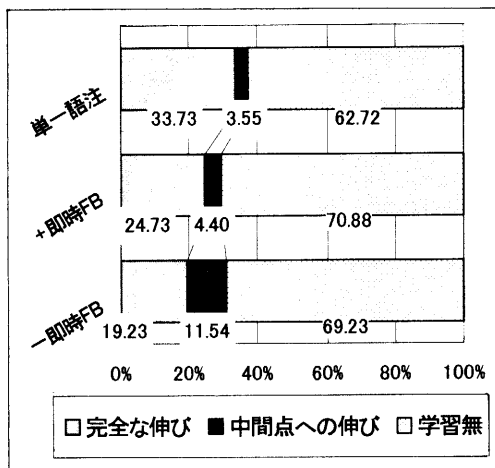


図2 事前-直後への学習の伸び分類

「多肢選択語注-即時FB」群においては「中間点への伸び」が多く、「完全な伸び」が他の条件群に比べて少ないことが明らかになった。このことから、意味が確定できない場合には、曖昧な意味までしか理解が深まらないことが示唆された。

また、単一語注群で最も完全な意味で学習が進んでいたのは、最初から意味が確定していたからだと思われる。Mondria(2003)は、推測後に意味を確定する条件と最初から意味を与える条件を比較した。結果はどちらも同程度学習効果が得られたが、所要時間は最初から意味を与えられた条件のほうが25%も少なかった。Mondriaは推測後の確定は、効率が悪いと結論づけている。本研究ではどの条件も同一時間内に読解を行わせたので、単一語注群で最も効率よく学習が進んだ可能性がある。

8. まとめと今後の課題

本研究では、Involvement Load 仮説を支持する結果は得られなかった。これは Involvement Load 仮説では、誤った推測が起こる可能性を考慮していないからであろう。本研究では、各語の理解の深さを見たところ、正しい意味が確定できたほうが学習が進んでいた。よって、誤った推測を訂正し確定することが付随的語彙学習の促進には必要だと思われる。今後は、より語を覚えやすくする確定のあり方を探りたい。本研究でのFBの与え方では評価が起らなかった可能性がある。評価も起き、正しい意味も

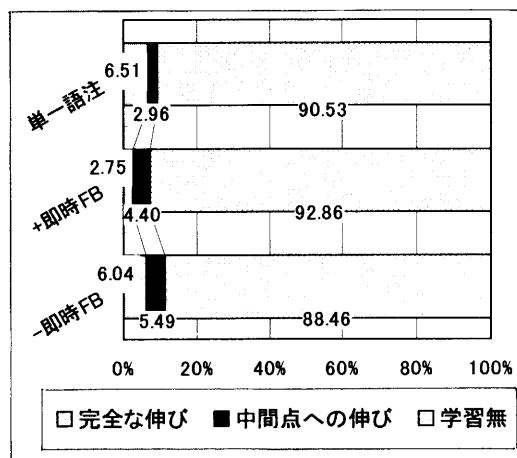


図3 事前-遅延への学習の伸び分類

確定できるようなFBの方法を考えていきたい。

参考文献

- 投野由紀夫 編著(1997)『英語語彙習得論 ポキャプラリー学習を科学する』 河源社
- 徳田恵(2005)「未知語との関わり度が語彙学習に与える影響-多肢選択語注と一語の語注との比較-」(未公開) お茶の水女子大学大学院修士論文
- 谷内美智子 (2003) 「付随的語彙学習に関する研究の概観」 『第二言語習得・教育の研究最前線 2003年版』 日本言語文化学会研究会,78-95
- Hulstijn, J.H. (1992) Retention of inferred and given word meanings: experiments in incidental vocabulary learning. In P. Arnaud and H. Bejoint, *Vocabulary and Applied Linguistics*. Macmillan, 113-25.
- Lauffer & Hulstijn (2001) Incidental vocabulary acquisition in a second language: The construct of Task-Induced Involvement. *Applied Linguistics*, 22, 1-26.
- Mondria, J-A(2003) The effects of inferring, verifying, and memorizing on the retention of L2 word meanings, *Studies in Second Language Acquisition*, 25, 473-499.
- Mori, Y. (2002) Individual differences in the Integration of Information from context and word parts in interpreting unknown kanji words. *Applied Psycholinguistics*, 23, 375-97.
- Nagata, N. (1999) The effectiveness of computer-assisted interactive glosses. *Foreign Language Annals*, 32, 469-479.
- Watanabe, Y. (1997) INPUT, INTAKE, AND RETENTION Effects of increased processing on incidental learning of foreign language vocabulary, *Studies in Second Language Acquisition*, 19, 287-307.

とくだ めぐみ/お茶の水女子大学 国際教育センター

megumi@jocv.net